

日中同時通訳における誤訳しやすい長文に対応する
ストラテジーとテクニック

龐 焱

On the Strategies and Skills of Coping with Long and Complex Sentences
in Japanese-Chinese Simultaneous Interpreting

PANG Yan

要 旨

本論文は、本研究で定義した“時間推移節目の分析法”に基づき、日中同時通訳における誤訳しやすい長文の特徴とあわせて、コーパスのデータに基づいた分析と考察を通じ、誤訳しやすい長文に対応する戦略とテクニックをまとめたものである。

いかにして、これらの戦略、特に対応テクニックをより効率的に改善していくか、そして、これらの対応方法を日中同時通訳に利用していくかという点も、今後の研究を前提に考察に含めていくつもりである。

キーワード：日中同時通訳、誤訳しやすい長文、パラレルコーパス、戦略、テクニック

Summary

By adopting the method of corpus-based text analysis along with evolving time nodes, this paper investigates the features of long and complex sentences in Japanese-Chinese simultaneous interpreting, and concludes with some strategies and skills for coping with these difficult sentences.

In the end, the paper also touches upon the implications regarding how to integrate these strategies and skills into the profession and pedagogy of Japanese-Chinese simultaneous interpreting.

Keywords: Japanese-Chinese Simultaneous Interpretation, Mistranslation Long Sentences, Parallel Corpus, Interpretation Strategies, Interpretation Skills

はじめに

龐 (2014a) は、日中同時通訳における誤訳しやすい長文の文型特徴を考察した。その結果によると、日中同時通訳の質に大きく影響する誤訳しやすい長文は、主に二つのタイプがある。それは、連体修飾語が長く、文の中心成分である述語又は助詞を含むフレーズが後置されるタイプと、連体修飾語が複雑すぎるタイプである。

仲 (2008:109) は、同時通訳は専門訓練によって習得できる通訳技能のひとつだと述べている。つまり、同時通訳の訓練と作業の基本原則に従えば、トレーニングの効果が現れ、効率よく通訳の作業を遂行できるようになるということである。

以上の文型特徴による影響と干渉をいかに最小限度に抑えるか、いかに効率よく日中同時通訳の訳出の質を改善するかという問いのもとに、本論文では、日中同時通訳における誤訳しやすい長文に対応するストラテジーとテクニックを見出すことを目的とする。

1. 本論文における“ストラテジー”と“テクニック”の定義について

通訳及び同時通訳に関する主要文献を概観したところ、「ストラテジー」、「原則」、及び「テクニック」などの用語に明確な定義が与えられていないことが分かった。つまり、「ストラテジー」の中に「テクニック」の意味が含まれたり、「テクニック」の中に「ストラテジー」の意味が含まれたりしている。さらに、「原則」の中に、「テクニック」と「ストラテジー」の意味も混じっているため、非常に混乱しやすい状態にある。それゆえ、「ストラテジー」と「テクニック」の習得について論じる前に、この三つの概念の関係を整理し、各概念の具体的な意味と範囲を明らかにしておく必要があると思われる。

Moser-Mercer, et al. (2000) は、翻訳と通訳を習得する際、特定の問題を解決するために、関連するテクニックと規則を勉強する必要があると述べている。Pöchhacker (2004, 2010:143) は、通訳活動は、目的性が高い選択プロセスであるため、ストラテジーは意図によるコントロールの下で、目的性があるプロセスと定義して良いと述べた。先行文献に基づき、通訳のストラテジーに関して、次のいくつかの定義をまとめた。(1) Gran (1995) は通訳の臨機応変な創造力 (creativity) を分類し、比較するため、通訳のストラテジーを「事前の計画であり、特定の規則に基づき、十分に理解し、習得した行為である」と主張した。(2) Kalina, s (1994) は、正確に訳出するために使用したすべての方策を通訳のストラテジーと見なしている。そして、このストラテジーは予測、逐次的修正、理解ストラテジー、訳出ストラテジー、その他ストラテジー (例えば：準備ストラテジー、要約ストラテジー) などの内容を含んでいる。(3) Pöchhacker (2004, 2010:143) は、通訳活動のストラテジーと訳出の困難をあわせて考えている。そして、通訳のテクニックをストラテジーの同義語と見なしている。(4) 楊承淑 (2008:55) は、反復練習によって習得できる通訳手法をテクニックと称し、通訳者が SL (起点言語) 状況にあわせて訳出を調節する方法と総合能力をストラテジーと称している。

SLとTLの文法構造差異の問題に関して、先行文献では、ウェイティング (Waiting)、セグメント (Segment)、予測などの対応方法を巡って、さまざまに述べられている。ウェイティング (Waiting) とは、時間分配のストラテジーを指し、その目的は、文の意味を表現するための重要な成分が現れてくることを待つこと、或いは、明確な情報を入手することである (Kirchhoff 1976:225-232)。セグメント (Segment) とは、構造を組み立て直すための重要なストラテジーの一つで、SLの複雑な文を区切り、聞き取って、訳出していくための手段に係わっている。そして、予測とは、“アップダウン” (up-down) に基づく意味に関する認知ストラテジーであると Chernov (1979:227-295) は示している。

本論文は、コーパスのデータの分析を通じ、通訳者が同時通訳におけるSLとTLの文法構造の差異を処理する際に使用した手法と処理方法を分析することに重点を置いている。そこで、本論文では、KalinaとPöchhackerの通訳ストラテジーに対する理解に基づき、通訳者が一つの会議の中で、同時通訳作業をスムーズに進めるために使用した全体的な訳出方法をストラテジーと定義し、作業中の部分の具体的な処理方法をテクニックと定義する。

2. 本論文におけるストラテジーの分析

情報の聞き取りと訳出は同時に進行しているため、通訳者はSLと似通った文法構造を使って作業をする習慣がある (De Bot, K. 2000:65-88)。Isham (1994:191-209) は、通訳者は、TLで情報を表現する際に、言葉の選択や文法構造において、SLとの“近接効果” (proximity effect) を示すことを指摘した。“近接効果”は、ショート・センテンス (short-sentence) やセンス・グループ (sense group) などを処理単位として起こる。つまり、通訳者は、センス・グループを処理単位として、聞き取った情報を分析し、理解する時に、耳に入ってきた新しい言葉や文の構造の影響を受けているため、SLの文法構造の順番に従って、SLと近い表現を使用する傾向がある。

龐 (2014b) は、日中両言語の文法構造の相違点について詳しく述べている。日本語の文は述語+目的語の構造であるため、述語動詞が文の中心成分となっている。そして、発言者の主観的態度を表す述語動詞がしばしば文末に来るので、文末から文頭文を分析し、理解しなければならない。その一方、中国語は、いくつかの述語動詞を連続して使用することが殆どで、事象の発生時間の順番と推移方法に従い、一つ一つの事象をはっきり述べる傾向があり、意味の統合を重視する言語である (孫 2003:73-74)。これらの相違点によって、日中両言語の文法構造と表現の習慣も違って来る。しかし、同時通訳とは、通訳者が発言者の話の内容を、ほぼ同じスピードで口頭で別の言語で表現することであるから、即時性は同時通訳のきわだった特徴である。つまり通訳者は、発言者とほぼ同時に“聞き取る”と“喋る”という二つの動作を進めなければならないため、発話を止めたりする時間は殆どない。もし、通訳者がSLの構造を大きく調節するなら、同時通訳作業の負担が増えるため、訳出の連続性に大いに影響する (鮑鋼 2005)。したがって、同時通訳の最も難しいところは、理解と表現に際して使用する二つの言語を互いに干渉させないことである。これができれば、通訳者は区切らずとも正確に情報を聞き取れ、SLからの影響を受けずに、表現の連続性を保つことが出来る (劉和平 2005:

126)。日中同時通訳の特徴と難点に基づき、通訳者がいかに言語構造の調整による干渉と影響を減らすのか、いかに効率よく限られた時間内に同時通訳の訳出の質を改善するのかについて、万弘瑜、楊承淑（2005:73-77）は、「順送りは素早く情報を蓄え、タイミングよく文の構造を調節するために最も有効な方法で、言葉の差異が大きな言語間における最も良いストラテジーでもある」と論じた。

理論的というと、順送りを同時通訳のストラテジーとするのは、通訳者の時間を節約し、プレッシャーを解消するのに非常に効果的である。しかし、日中両言語のように大きな差異がある場合、通訳者が作業中に、順送りのストラテジーに基づき、同時通訳活動をしていると言えるのだろうか。これを明確するために、筆者がコーパス¹⁾の中における70文字以上の長文を分析してみた。分析の結果、4名の通訳者は長文を同時通訳するときに、全員「順送り」の“ストラテジー”を使い、使用率は100%に達していることが分かった（表1参照）。

表1 ストラテジーの使用例

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 Y	通訳者 D
今、あの、この場で、あの、議論が多いのはイノベーションということに対して議論が多いのですが ²⁾ 、実は私、昨日一日かけて、ええ、私は自動車関係の仕事をしているんですが、この広州地区で、え、七か所の我々のオペレーションをやっていると、あの、訪問いたしました。	目前，我们，诶，讨论的是，很多的是关于，诶，技术创新的部分，我昨天花了一天的时间，因为我，我本身是汽车相关产业，所以在广州地区，我们有，恩，七个地方我们有，恩，相关合作的地方，我去拜访了。	今天讨论的，讨论集中在创新，集中在，创新，恩，昨天，恩，我，我本身是从事汽车业，我们有七个地方，诶，参，参观了，恩，我们的工厂，	那在这里呢，有很多讨论师，因为，恩，关于这个创新有非常多的议题，那昨天呢，我花了一点的时间，我是从事这个工，恩，车子的一个，恩，marketer，那我们访问了一些地方呢，	现在大家在讨论的就是一个创新的问题。事实上，我在昨天花了一整天，因为我是汽车关，相关的业界，所以我拜访了广州的一个，7间，跟我们合作的关系的公司，
ええ、私は偶々、あの、日本で、一千社以上が会員であります、知的財産協会、の、チーフをしておりますが、あの、日本の企業は、多く、大変多く、この広東省で、え、物造りをする、と、実際にやっておりますが、え、まだまだやりたいという企業が多いのは事実であります。	日本有一千家公司以上作为成员的智慧，智慧财产权的一个组织，(p) ³⁾ (4)日本有许多企业在广东省从事制造业，不过，仍然有许多的企业希望能够投身广东省，	我刚好(p)(2)参与，有一千个，一千以上的(p)(3)成员，拥有一千以上企业成员的，诶，智慧，智慧保障协会，(p)(3)我也参与，在广东省参与制造业，这是有很多企业都有兴趣从事制造业，恩，制造，	我只是偶然，在日本呢，看见了一千个公司，我是会员的一个，恩，智慧财产协，协会的一个领导人物，那么日本的企业呢，非常多在，广东省，恩，从事，恩，创造，从事制造。那，其实呢，事实上还有很多企业想要从事这方面。	在，有一次偶然之间呢，(p)(4)我曾经，恩，(p)(2)就是我任的，就任一个日本的智慧财产权的一个有一千家公司的智慧财产权协会的一个主任呢，日本呢，基本上，在做一些新的设计的时候呢，虽然我们已经在做很多的技术创新的，不过还有陆陆续续更多的公司想要来参加。
ええ、そうすれば、その、現在の力を更に強化できるのみでなくて、今、皆さんが議論している将来のためのイノベーションを促進することにも力を発揮するだろうと思います。	这样一来要，不只，不只能够加强，恩，广东省的能量，在未来的技术创新也可以再促进。	(p)(2)把目前的力量更加强以外呢，各位讨论的未来的创新，这方面也是有用的，有贡献的。	恩，所以呢，目前的一个，恩，这个力道可以再加之外呢，恩，其实刚刚在，在场，大家所讨论的，其实也可以，恩，推，推进这个创新的成果。	只要这样，如果能够达成这样子的话，就能够让，强，加强广东省现在的力量，而且对未来的一个创新呢，也能够得到一个促进的结果。

- 1) 本研究用のコーパスは、筆者が研究の目的と合わせて造ったもので、日本語のSLは約10万字数で、中国語のTLは約36万字数である。具体的な内容は、龐（2014b）を参照。
- 2) 下線は、発言者の話の中で接続詞が現れたことを指すものだ。
- 3) Pは、PAUSEの略である。

表1の例文からすぐに分かることは、日中同時通訳の際、通訳者は全員無意識的に“順送り”のストラテジーを取っていたということである。これは、英中同時通訳に関連する結果と一致している。つまり、同時通訳の作業中に、通訳者が受けた情報を逐次的に処理するのではなく、SL文をいくつかのセンス・グループか概念単位に区切ることによって、一つ一つのセグメントを理解し、整理しながら、TL（目標言語）で表現していく。なぜなら、同時通訳者は「ほぼ発言者と同じスピードで、口頭で発言者の伝えたい情報を、別の言語で再度表現すべきだから」である（劉和平 2005:3）。

表1の結果によると、同時通訳者が採用しているのは、時間の節約ができ、通訳者のプレッシャーの解消も出来るこの“順送り”のストラテジーと思われる。

3. 本論文における誤訳しやすい長文に対応するテクニックの分析について

龐（2014a）は、日本語の誤訳しやすい長文に、主に二つのタイプがあることを論じた。この二つの長文のタイプは、以下のようになっている。

- (1) 文の意味を表現する重要なキーワードを後置し過ぎるタイプ。文の構造ゆえに生じる連帯修飾をともなう誤訳しやすい長文の中で、文の重要な成分が後置されすぎ、通訳者が文のまとまった意味を捕まえられず、中国語の表現を始めるための述語動詞或いは助詞を含むフレーズを把握することが出来ないため、訳出を誤るに至る。このタイプが誤訳しやすい長文の中で占める割合は、78%以上に達している。
- (2) 連体修飾語が複雑すぎるタイプ。このタイプの特徴は、文の中に二つ以上の文を繰り返しているため、構造が非常に複雑である。このタイプの文はコーパスの中で10.64%の割合を占めている。

以上のデータから分かることは、この二つのタイプの誤訳しやすい長文の誤訳問題を解決すると、同時通訳の全体的な品質が向上するということである。本コーパスの考察を通じ、通訳者らがテクニックを運用するときの差異を分析し、上記の二つのタイプの誤訳しやすい長文を通訳するためのテクニックを見出すことは、日中同時通訳の訳出の質の改善に役立つと考えられる。

本コーパスにおける通訳者の訳文を分析した結果によると、同時通訳時、通訳者が常に“順送り”に従い、語彙、文節、定型表現などの単位ごとに、逐語的に対応することを同時通訳の方法としていることが分かった。「逐語的な対応は、意味を等価に通訳していくことに何も役に立たない。同時通訳において、通訳者の言葉だけの対応方法による訳文は、聞き手からすれば、非常に晦渋で、分かりにくいものでしかない」（Lederer 2001）。したがって、同時通訳はそれとは異なるテクニックによって、SLの完全な情報を復元することによって、通訳の文脈的等価を求めべきである。

3.1 時間の推移と通訳者の作業状態の節目⁴⁾の分析モデル

龐（2014a）の研究結果に基づき、筆者が同時通訳の時間の推移と通訳者の作業状態の節目の分析モデルをまとめてみた。このモデルを“時間推移節目分析法”と本論文の中で呼ぶことにする（図1参照）。

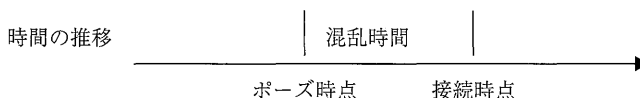


図1 時間推移節目分析法

通訳者は同時通訳の推移に従い、“順送り”のストラテジーに基づき、受けた情報を一つ一つ訳出していく。このプロセスの中で、通訳者がスムーズに理解し、表現しようとしても、様々な要因により、ある時点から通訳者の作業が干渉され、話が止まってしまう。本論文では、この干渉によって止まってしまう時点を“ポーズ（Pause）時点”と呼ぶ。通訳者は“ポーズ時点”をきっかけとし、この一瞬から、情報の検索、整理、表現の推敲などの時間に入る。この時間に入ると、通訳者の認知プロセスが混乱してしまうため、本論文では、この時間を“混乱時間”と呼ぶことにした。通訳者はこの“混乱時間”における情報の再整理を経てから、すなわち、この“混乱時間”を抜け出してから、改めて新しい情報の伝達をし始めるので、本研究では、“混乱時間”から、口を開いて情報伝達を再開するに至るこの節目を“接続時点”と定義した。

ここで説明すべきことは、文法構造がまったく同じ文でも、通訳者によって、作業中の“ポーズ時点”、“接続時点”の位置及び“混乱時間”に陥る時間がそれぞれ異なることである。これは、各通訳者の考え方や、認知的習慣やクセがそれぞれ違うためだと考えられる。データの分析から分かったのは、文法構造の同じ長文に対する処理は、通訳者全員が同じ処理方法を取っていることである。すなわち、通訳者らが後置された述語動詞や後置助詞を理解し、処理をする時、皆同じく躊躇しながら、話が止まってしまう現象が見られているため、この文型を処理する時に、似通った考え方を取っていると思われる。したがって、通訳者の“ポーズ時点”と“接続時点”が留まっている位置及び“混乱時間”の長さがそれぞれ違っているにもかかわらず、各段階における通訳者の使用したテクニックの分析には影響しないことがはっきり分かったのである。

誤訳しやすい長文が通訳者にもたらす困難は、主に通訳者が“混乱時間”に止まる時間が長くなる点にある。同時通訳が正しく訳されているかどうかは、主に“接続時点”を経た後の訳出語の正確さを見るべきである。通訳者は“混乱時間”において、処理した情報を伝達していく。この情報が発言者の内容と一致しているならば、正しいと判断できる。もし、発言者の話している内容と異なっているならば、その訳は間違っているか正確ではないと判断する。

したがって、このモデルに基づき、正確に情報を伝達した通訳者の二つの節目と見られる時

4) 本研究では、時間の推移につれて、通訳者の作業状態がはっきり変わる時点を指す。

点と“混乱時間”における処理方法を分析し、まとめることが出来れば、同時通訳者が誤訳しやすい長文に対応するテクニックを見出すことにつながると考えられる。

3.2 文の意味を表現する重要なキーワードが文末に後置されるタイプの通訳テクニックの分析について

コーパス中の“述語など重要な成分が後置すぎるタイプ”の誤訳しやすい長文の分析から分かったことは、重要な成分が後置すぎるという特徴によって発言者の話の主旨と目的を把握しにくくなるため、通訳者にとって、どのような中国語の動詞を使って中国語の訳文を始めるのかを決めることが、非常に難しくなるということである。通訳者が選択ができずに躊躇し始める時点は、図1で示したモデルの“ポーズ時点”である。

“ポーズ時点”に入ったとたんに、通訳者は直ちに“混乱時間”に入る。“混乱時間”における通訳者の認知プロセスは非常に複雑で、混乱している状態にある。これは、意味を理解するため、適切な動詞を選ぶためなど、様々な要因によって起こっているのだが、いずれにせよ、発言者の真意を理解した上で、訳文を正しく、素早く、スムーズに表現しようとするため行っていることである。

通訳者はこのタイプの誤訳しやすい長文を処理する際、“ポーズ時点”から“混乱時間”に入った後、どのような方法とテクニックを使って、この時間における情報の処理を行っているのだろうか。筆者が本コーパスの中のデータを分析し、分かったことは、以下のとおりである。

訳文が正しいかどうかにかかわらず、4名の通訳者は文法構造の影響によって中国語の訳文を始めることができず、話が止まったところ、つまり、“ポーズ時点”から、ウェイティング(waiting)して、ずっと“混乱時間”の状態にあった。ウェイティングのテクニックの具体的な形としては、完全に無言のままのポーズ、“我相信呢……”、“我想……”、“也就是……”などの具体的な意味がない表現で対応する、或いは、“嗯”、“呃”などの発声語で沈黙を代替するなどがある。

このテクニックの使用は、以下のデータを通じて説明できる(表2参照)。

表2 通訳者の“混乱時間”における“ウェイティング”テクニックの使用例

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 Y	通訳者 D
ええ、私は偶々、あの、日本で、一千社以上が会員であります、知的財産協会、の、チーフをしておりますが、あの、日本の企業は、多く、大変多く、この広東省で、え、物造りをする事、実際にやっておりますが、え、まだまだやりたいという企業が多いのは事実であります。	日本有一千家公司以上作为成员的智慧, 智慧财产权的一个组织, (p) (4) 日本有许多企业在广东省从事制造业, 不过, 仍然有许多的企业希望能够投身广东省,	我刚好(p) (2) 参与, 有一千个, 一千以上的(p) (3) 成员, 拥有一千以上企业成员的, 诶, 智慧, 智慧保障协会, (p) (3) 我也参与, 在广东省参与制造业, 这是有很多企业都有兴趣从事制造业, 恩, 制造,	我只是偶然, 见了一千个公司, 我是会员的一个, 恩, 智慧财产权的一个领导人物, 在日本呢, 看那么日本的企业呢, 非常多在, 广东省, 恩, 从事, 恩, 创造, 从事制造。那, 其实呢, 事实上还有很多企业想要从事这方面。	在, 有一次偶然之间呢, (p) (4) 我曾经, 恩, (p) (2) 就是我任的, 就任一个日本智慧财产权的一个有一千家公司智慧财产权协会的一个主任呢, 日本呢, 基本上, 在做一些新的设计的时候呢, 虽然我们已经在做很多的技术创新的, 不过还有陆陆续续更多的公司想要来参加。

表2の例を分析してみると、通訳者Pは情報が入ってくる順番どおりに、情報を一つ一つ区切りながら、同時通訳をしていく。“智慧产权的一个机制”を訳した時から4秒訳出が止まっている。これほど長く止まっていたのは、なぜなのか。訳文を見ると、明らかに、通訳者が発言者の言いたい重要な要旨をとらえていない。つまり、話の最後に来た“チーフをしておりますが”という文を待っていたようで、4秒もかかっていたことが分かる。

通訳者Yは、著しいポーズはなかったものの、訳文の中を頻繁に区切っていたことは、一つ一つが考え直しとしての“ポーズ”だったと見なすことが出来るだろう。通訳者Yは一つ一つ短い情報単位をポーズの節目として、これらの節目に頼って、絶えず理解と分析などを繰り返す状態を続けている。“混乱時間”が非常に短くて、伝えた訳文も不自然な感じが一つもなく、通訳者が中国語の訳出をなかなか始められない節目のところには、“嗯”という発声語を使用し、ウェイティングをしていたと見られる。これも通訳者のウェイティングのテクニックが効いていると理解して良いだろう。

以上の分析をまとめると、通訳者は重要な述語動詞または後置助詞が後置されたタイプの長文を処理する際に、それぞれ“ポーズ時点”を経て、“混乱時間”に入ってから、“ウェイティング”のテクニックを生かしていると見られる。“ウェイティング”の形はいろいろあるが、例えば、無言のままのポーズや、発声語の“嗯、这个”などの具体的な意味がない言葉で対応していると見られる。

通訳者は“混乱時間”に入ると、“ウェイティング”のテクニック以外に、どんなテクニックを使って、積極的に通訳者の主観的な推測能力を発揮し、発言者の後続してくる話の意味を理解しながら、自分なりのTL表現を整理しているだろうか。

通訳者が“混乱時間”に行おうと努力しているのは、最大限に話を理解した上で、最も正確かつ、流暢な表現をすることである。特に話の中で動詞などの重要な成分が後置すぎるため、通訳者が正確に意味を判断の出来ない場合には、「SLの情報が揃っていない中で、後半に来る内容の予測をしなければならない、つまり、前もって通訳をするべきだ。」ということである(仲偉合 2008:138)。

通訳者はどのように“予測”というテクニックを利用すれば、話をよく理解し、正確に推測することができるのだろうか。仲偉合は、「予測をする時は、話の大体の流れを分かった上で、大胆に推測すべきだ」と述べる一方、「通訳者の予測は、盲目的な行為ではなく、豊富な経験に基づいたものだ」と指摘した。この豊富な経験には、二つのものがある。一つは、しっかりと二ヶ国語を身につけた上で、文法構造と言葉の組み合わせに対する豊富な経験を重ねることである。この経験によって、通訳者は話の前半の構造から、後半の大体の内容を判断することが出来る。これは、“言語内の予測”と呼ぶべきものである。もう一つは、大量の同時通訳の経験に基づき、会議の内容がよく分かっている場合であり、通訳者は話の冒頭を聞いただけで、発言者の話したい大体の内容が分かってくる。これは、“言語外の予測”に属している。

Sperber & Wilson (1986) の関連性理論によれば、話の理解とは、話のコンテクストを通じて、情報の関連性を求めることだとされる。そして、話とコンテクストの関連状況に基づいた推測によって、コンテクスト効果を求めるべきだとされる。一般的には、関連性が強い話は、推測

しやすく、コンテキスト効果が良い。逆に、関連性が弱い話は、推測しにくく、コンテキスト効果が悪くなるという。この理論によると、通訳者の話に対する理解のスピードと品質を改善する方法は、話の情報と緊密に関連するコンテキスト仮説を最大限に構築するか、見出すことである。

筆者が本コーパスにおけるデータを分析した結果、通訳者は作業中に、特に“混乱時間”に入ってから、無意識に“予測”というテクニックを使用し、しかも、この“予測”のテクニックの使用は、通訳者の話の理解に非常に有効な役割を果たしていることが分かった。

例えば：

従いまして、え、積極的に、技術移転を、してもらうためには、広東省は、中国の他の地方よりも遥かにこの知的財産問題のハンドリングが優れている、世界レベルであるという認識を皆さんに与えることが大変大事だというふうに思っております。

本論文で定義した“時間推移節目分析法”に基づいて、以上の文を分析してみると、話の中の“……広東省は”は一つの“ポーズ時点”で、通訳者はこの一瞬から、“混乱時点”に入り、話の重要な成分である“……認識を皆さんに与えること”が現れてくるまでに、長いウェイトイングがあった。ウェイトイングしながら、通訳者が“予測”のテクニックを利用して、後続の内容を推測していた。単に文の構造に従って内容を理解するなら、話が“……この知的財産問題のハンドリングが優れている”まで進んできた時に、通訳者の判断は“广东省的知识产权保护优于其他地区（広東省の知的所有権保護は、中国の他のところより良く出来ている）”となるかもしれない。それから、すぐに“世界レベルである”という情報が通訳者の頭の中に入ってきて、これを“是具有世界水平的（世界レベルである）”というふうに理解するのは中国語のネイティブとして当然なことだ。しかし、話の最後まで待つと、意味が急速に変わり、“……認識を皆さんに与えることが大変大事だというふうに思っております。”となり、発言者の言いたい意味は、今まで理解した内容と違ってしまった。

通訳者はこの文を理解する際に、“予測”のテクニックを使うだろう。つまり、関連性理論に従えば、“前後の文脈（コンテキスト）とあわせ、理解の関連を求める”必要があると思われる。具体例として、発言者が話を始める当初の、“それで、先ほど、話がありますように、イノベーションも、勿論そうですが、その技術移転をしてくる時に、まだ多くの企業が知的財産問題に、懸念を持っております”という発言のコンテキストから、通訳者は、発言者が広東省の知的財産保護を高く評価する態度ではないと判断できると思われるので、続きの話は、広東省に対する期待か、要望というニュアンスになるはずである。一方、広東省の通訳者としては、普段分かっている常識又は経験に基づき、当面、広東省では、知的財産における保護はまだうまく出来ていないのは、事実であるということ予測すべきである。この話の筋に沿っていくと、通訳者は発言者の大体の態度、或いは、話の大体の方向性を判断できるはずである。

以上の分析をまとめてみると、通訳者が日中同時通訳の“混乱時間”に入ってからよく使っていたテクニックは、大きく分けると、“ウェイトイング”と“予測”であると見受けられる。

“ウェイティング”にも多様な表現形式がある。例えば、完全に無言なポーズや“嗯、啊”などの発声語で、ウェイティングの時間を延ばしたりする方法である。通訳者はウェイティングをしながら、“予測”のテクニックを使用し、“言語外の予測”と“言語内の予測”を通じて、つまり、話の中にある接続詞などによる推測を通じ、発言者が語ろうとする発言の目的、要旨などを推測し、或いは、話の中にあるコンテキストの関連を通じて、話の目的と意図を引き出しているのである。これらのテクニックの使用は、通訳者の話に対する理解能力の向上、あるいは通訳者の聞き取る負担を減らすことに積極的な意義を持っていると見られる。その結果、通訳者の訳出の質を改善することが出来ると思われる。

次に、通訳者が“混乱時間”を出た後、つまり“接続時点”から、どんなテクニックを利用して、自分の同時通訳の質を改善していくのかを見てみよう。

筆者は“重要な成分が後置される誤訳しやすい長文”を二つの場合に分けて、同じくコーパスの中にある通訳者の対応するテクニックを分析し、考察した。

(1) 述語動詞が後置される場合

主に“放棄”、“重複”と“修正”というテクニックを使っていたことが分かった。既出の表2にある例文を通じて、通訳者のこの三つのテクニックの使用状況を詳しく分析してみよう。

表2の例文“ええ、私は偶々、あの、日本で、一千社以上が会員であります、知的財産協会、の、チーフをしておりますが”を、通訳者Pは、“日本有一千家公司以上作为成员的智慧，智慧财产权的一个组织，(p)(4)”と訳した。訳文から分かるように、通訳者Pは正しく発言者の話を理解できず、正しく訳出していなかった。つまり、通訳者Pは、訳文の中にある“チーフをしておりますが”という文を聞き漏らしてしまったが、4秒ポーズしてから、つまり本論文の中で定義した“混乱時間”を経ても、聞き漏らした情報を修正できず、いきなり、聞き漏らした内容を放棄して、直接後半の内容の伝達に入った。勿論、改めて通訳者Pがここで聞き漏らした内容を見てみると、この内容の脱落は、発言者の喋りたい全体の意味の伝達に影響を与えていないことが分かる。Stenzl, C (1989:6-23)は、「多少、情報の脱落があっても、筋道がはっきり立っている訳文は、内容が完備された訳文を求めるために、筋道がはっきりしてなくて、理解しにくい訳文より、聞き手にとってより重要だ」と指摘した⁵⁾。以上の観点に基づき、通訳者Pが、ここで使っている“放棄”というテクニックは“省略”というテクニックに相当すると思われる。このテクニックをここで使うのは非常に成功していると言えるだろう。

通訳者Yは、この文を通訳する時に、“修正”というテクニックを使った。通訳者Yは“我只是偶然，见了一千个公司”と訳した時、自分の理解と発言者の表現しようとする内容とがずれ違っていると気がついたとたん、すぐ訳文を修正し、自分の聞き取った新しい内容に基づき、訳文を“我是会员的一个”に直した。その後、後置されている動詞をしばらく待ってから、改めて訳文を正確な方向に戻し、“智慧财产协，协会的一个领导人物”と訳し直した。

通訳者Dは、この文を訳す時、“重複”のテクニックを使っていた。割と長いポーズをとってから、通訳者Dはこの文を“就是我任的，就任一个日本的 智慧财产权的一个有一千家公司智慧财产权协会的一个主任呢，”と訳して、“一个日本的智慧财产权”を伝えた途端、直ち

5) www.aiic.net/viewpage.cfml-articale 117より引用。

に区切らず、上記の内容を“的一个有一千家公司の智慧财产权协会的一个主任呢”によって重複させた。それは、単純な重複ではなくて、重要なところに“的”という字を加えることによって、訳文をうまく調整をし、発言者の発言の意図を完璧に伝えた。

以上をまとめると、通訳者が“接続時点”を経由して、“混乱時間”を出るまでに、二つの処理方法があった。一つは、しばらく躊躇しても、発言者の本当の意味を理解できず、間違っ
て訳してしまった場合である。もう一つの場合は、通訳者が“混乱時間”の間に訳語の選
択を見直すことを通じて、発言者の意図を正確に、または、ほぼ正確に推測し、理解が
出来て、訳した例である。勿論、正確に訳すまで、色々工夫をしているわけだが、通
訳者全員が“接続時点”以後の情報を適切に処理し、対応していたことが分かった。
一つには、“修正”というテクニックを使った例があった。“混乱時間”に入って、
聞き取りながら、理解し、理解しながら、訳文を調整していく。最後に、完全に予
測が間違っていた述語動詞を正確な方向に直していく。もう一つの処理方法は“重
複”というテクニックである。つまり、通訳者が聞き取った内容を訳しながら、理
解をしている間に、間違っていた訳文をほぼ重複の形で、情報を調整し、修正して
いく。“混乱時間”を出てからでも、自分の訳文が間違っていたことに気がついて
も、時間の制限によって修正できないとすれば、“重要な情報を守り、二の次の情
報を捨ててしまう”という考え方に従い、いきなり“省略”か“放棄”というテク
ニックを選ぶことにして、脱落した内容の補足を諦めることも可能である。デー
タの分析結果によると、これは、非常に有効な良いテクニックであることが分か
った。

(2) 助詞を含むフレーズが後置された場合の“接続時点”以後の通訳テクニック

データの分析によると、4名の通訳者は基本的に、発言者の話の中に出てきた後置助詞
を含むフレーズを正しく訳せなかったことが分かった。よく見られる処理方法は、後
置助詞を含むフレーズの通訳を諦めるという方法だ。その理由は、通訳者が“混
乱時間”に入ってから、“言語内の予測”と“言語外の予測”によって、後ろに
出てきそうな後置助詞を含むフレーズを予測することが出来なかったためだろう
と思われる。助詞を含むフレーズが後置する現象は、文の中のミクロ的な問題で、
通訳者があらかじめ分かっている語彙または表現を通じて予測できるものではな
いため、通訳者が、“混乱時間”においても発言者の細かい内容を推測、理解で
きず、突然に現れてくる後置助詞を含むフレーズに対応するのが、殆ど手遅れに
なってしまう。

それでは、通訳者はいかにして、日本語の長文の中に出てくる後置助詞を含む
フレーズを処理すべきなのか。つまり、通訳者が“順送り”のストラテジーに従っ
ている作業中に、急に現れてきた後置助詞を含むフレーズに対して、どのような
テクニックを利用して、正しく対応すべきなのか。

筆者の長期間に渡る同時通訳の経験に基づき、本論文に使用したコーパスのデー
タを分析した結果から分かったのは、対処の一つの方法として後置助詞を含むフ
レーズの意味に相当する短い文を使って、意味を補足することが有用であるとい
うことである。

例えば：

表3 助詞を含むフレーズが後置しすぎるタイプにおける“接続時点”以後のテクニク

SL	通訳者 P	通訳者 A	通訳者 Y	通訳者 D
ええ、一番いい、ええ、効率を持ったところが使っている技術を、一番悪い、ええ、効率のところに移していく、まあ、移転をしていくと、技術を与えていくということによって、この一番悪い側の、ええ、プラントもですね、ええ、左の方に近づいていけるわけです。	而最好的，能源效率的厂所使用的这个技术呢，把这技术移转给最差的地方。(p) (3) 把技术赋予最差的地方，借此呢，让最差的这一个厂呢可以接近左边，可以把它的能源效率提高。	那最好的地方使用的技术移转到目前效率较差的工厂，把技术赋予给较差的地方，所以，这个时候，较差的工厂也会接近左边的效率。	所以最好的，所以要用最好厂商的使用的技术转移到最坏的厂商，释放去，提供技术让这个最坏的厂商的(p) (2)量也可以往左边靠近。	让，比方说，最好的工厂的技术，去转移到最差的地方，让大家都能够看齐的话，是不是就能够达到很好的一个减排的效果呢，

表3の話の中で、後置助詞が現れた“……まあ、移転をしていくと、技術を与えていくということによって、”の訳文を見ると、4名の通訳者が“……ことによって”という後置助詞を含むフレーズを理解できていないようで、全員ここで少し止まっていた。通訳者Pが最も正確に訳したが、“……ことによって”を巧みに短い文“借此呢”で接続した。この短い表現によって、訳文を原発言の意味に自然に一致させたのは、上手なテクニクだと見受けられる。通訳者Aは“……所以、这个时候”という短い表現を使っていたが、これも接続詞と同じ役割を果たしていると思われる。発言者の意図している意味と違っているにもかかわらず、うまく前後の文脈を繋げていたことは確かである。通訳者Yと通訳者Dはこのテクニクの使用が、ややつたないように見える。二人とも、しばらく止まっても、後置助詞を含むフレーズをうまく訳せなかったので、結局この処理を諦めている。

以上の分析に基づき、筆者は、後置助詞を含むフレーズに対する通訳者の“接続時点”以後の処理方法を以下のようにまとめた。

訳文の接続を上手くするための有用なテクニクのひとつは、SLの中に出てきた後置助詞の意味と似通っている短文又は連語を使って、訳文の意味を繋げ、補足することだ。

筆者がコーパスの中にあるデータを分析する上で、会議通訳の中によく出てくる後置助詞を含むフレーズをまとめてみた(表4参照)。

表4は、通訳者に最も基本的な対応方法を与えることを目的としている。

表4 助詞を含むフレーズが後置された場合の日中対訳表

SL	対応する短文
・・・のために	为此、因此呢
・・・に対して	与此相对呢
・・・に関して	关于这个问题呢
・・・に伴い	同时呢、
・・・にもかかわらず	尽管如此呢
・・・によって/よれば	据此呢、因此呢
・・・ではあるけれども	可是、虽然如此
・・・あるならば	如果这样的话呢
・・・に加えて	在此基础上呢
・・・に従い	遵循于此呢

3.3 “繰り込まれ長文” についての処理テクニク

“繰り込まれ長文”の難点は主に、文の中で修飾成分が多く、長いことだ。文の中に他の文が繰り込まれているので、通訳者が話を聞き取りながら、限られている時間内に文を正確に整理し、理解をすることは非常に難しい。

このタイプの文に対して、通訳者はどのようなテクニックを利用すべきなのか。

まず、筆者がコーパスの中にあるデータを分析してみると、4名の通訳者が“セグメント”のテクニックを使っていたことが分かった。つまり、通訳者は継時的で一つ一つ独立した意味を受け取ったため、話の全体的な意味を判断することが出来ず、一つ一つの独立した文を最小の処理単位とし、直ちに訳出することしか出来なかった。これは“セグメント”のテクニックだが、SLの文の構造が文の中にさらに文が繰り込まれている特徴を持っているため、通訳者が短時間に全体的な意味を整理した上で、“重複”などのテクニックを利用し、意味を組み立て直していくのは、ほとんど不可能なことだ。分析の結果から分かるのは、通訳者が、連体修飾語がかかっている中心的な体言、または連用修飾語がかかっている中心的な述語動詞を無視してしまい、伝えるべき情報の一部を欠落させてしまう状況に陥ってしまうことである。

例えば：

表5 繰り込まれ長文に対して通訳者が使用したテクニック

SL	通訳者 P	通訳者 D
ええ、ここで強調をしたいのは、ええ地域の特徴と強みを活かした、政府、民間企業、教育・研究機関の連携による共同開発機能の形成であり、官・産・学の役割分担による相乗効果の醸成であります。	我想强调的是地区的特征以及优势是必需要发挥的，而为此呢呢政府，地方政府以及民间的研究机构必须要合作。产，官，业各分其职，然后必须要达到合作无间。	这些，这里我想要强调就是，拥有地区特性强的政府和企业，共同开发，由产官学来彼此分工合作，来进行的，才有相成效果，

通訳者 P と通訳者 D は、基本的に正確にこの文を訳した。2名の通訳者の訳文を見てみると、二人とも、まず“セグメント”のテクニックを利用して、SL文の中で独立している意味を区切ってから一つ一つの TL 文に訳した。よりうまく訳した通訳者 P は、意味を整理し、調整する中で“セグメント”だけではなく、“増訳”というテクニックも使ったことが分かった。つまり、接続詞に相当する短文を加え、内容を補足している。例えば、“而为此呢呢”、“然后”などの発声語を使い、素早く意味を修正したので、訳文も非常に自然になっている。通訳者 D も“セグメント”のテクニックを使用した。通訳者 P と比較すると、独立した意味の長さが通訳者 P より長くなっているため、それぞれの意味の伝達は通訳者 P より、訳出単位が比較的大きい。“増訳”というテクニックの使用頻度も通訳者 P ほど多くない。その代わりに、通訳者 D の訳文の脱落と間違いは通訳者 P よりやや多くなっている。

興味深いことに、筆者がコーパスの中にある“繰り込まれ長文”の誤訳の特色を分析した結果から、これらの文はすべて書面で準備した口頭発表に使用したものであることが分かった。つまり、発言をする時、発言者が原稿を見ながら発言したものだ。筆者がデータを集める際に、これらの原稿を使った会議の背景、原稿の中に使った単語、術語などを通訳者に伝えた上で準備をしてもらったが、発言者が使った原稿そのものは通訳者に渡さなかった。したがって、書面の特徴を持っている口頭の発言に対し、時間のプレッシャーを感じながら、スムーズに話を訳していくのは、非常にむずかしかったと思われる。

以上をまとめてみると、“繰り込まれ長文”は、発言者が原稿を読む場合に多く現れてくるのであり、強い書面的な特色を持っている。つまり、文構造が複雑で、情報の量が非常に多いという特色があるので、通訳者が同時通訳の即時性のプレッシャーを感じながら、通訳が追いつかない局面に直面してしまう。その結果、訳文の脱落、間違い又は表現の乱れなどが頻繁に起きてしまう。通訳者が有効に対応するテクニックは、先に述べたように“セグメント”などによって、相対的に独立した文節を区切って訳していくしかない。それから、関連性がない文節と文節を繋げていくため、“増訳”というテクニックを利用して、脱落した情報を捕捉し、間違った内容を修正していく。しかし、これらのテクニックの使用は、限られている時間と膨大な情報に制約を受けているから、効果も人によってそれぞれ違ってしまふ。

それから、書面原稿がある場合、通訳者にとって最も効率が高い対応方法は、出来るだけ事前に原稿を入手した上で、通訳のための原稿を十分に準備することだ。これは、書面的な特色が強い発言に対応する最も効率の高いテクニックと思われる。

まとめ

本論文では、日中同時通訳における誤訳しやすい長文の特徴とあわせて、コーパスのデータに基づいた分析と考察を通じ、誤訳しやすい長文に対応する基本的な戦略とテクニックを提示した。勿論、日中同時通訳の質を改善し、レベルを向上させる余地は多く残されているが、本論文の方法は、一定の質の改善とレベルの向上に役立つと思われる。今後、いかにして、これらの戦略、特に対応テクニックをより効率的なものに改善していくのか、そして、これらの対応方法を日中同時通訳の中に利用していくかということが、筆者の今後の研究内容の一つになると考えている。

謝 辞

この研究は広東省教育庁特色創新項目（教育科研類）“日本語翻訳専攻修士実用型人材育成新方法探索”（プロジェクト番号：299-X5122104）の支援を受けていることを感謝して記す。

参考文献

- Chernov, G. V. (1979). "Semantic Aspects of Psycholinguistic Research in Simultaneous Interpretation," in Pöchhacker and Shlesinger (eds), pp. 227-295.
- De Bot K. (2000). Simultaneous interpretation as language production, in England Dimitrova and Hyltenstam (eds), pp. 65-88.
- Gile, D. (2006). Conference Interpreting. In Brown, Keith (ed.) Encyclopedia of Language and Linguistics (2nd ed.), Oxford: Elsevier. Vol. 3.9-23.
- Gran. (1995). Scientific Research vs. Personal Theories in the Investigation of Interpretation. In Gran, L. & C. Taylor (Eds.) Aspects of Applied and Experimental Research on Conference Interpretation, Udine, Campanotto.
- Isham, W. P. (1994). "Memory for Sentence From after Simultaneous Interpretation: Evidence both For and Against Deverbalization," in Lambert and Moser-Mercer (eds), pp. 191-209.
- Kalina, S. (1994). Interpreting competences as a basis and a goal for teaching . The interpreter's Newsletter.

- Kirchhoff, H. (1976). "Das dreigliedrige., zweisprachige Kommunikations System Dolmetschen," pp. 225-232.
- Lederer, M. (2001). Harmer, J. (trans.) A Systematic Approach to Teaching Interpretation .Silver Spring, MD: Registry of Interpreters for the Deaf.
- Moser-Mercer, et al. (2000). Quality in interpreting: Some methodological issue. The Interpreter's Newsletter. No. 7, pp. 43-45.
- Pöhhacker. (2004, 2010). Quality assurance in Simultaneous interpreting. In Dollerup, C. (ed.) Teaching Translation and Interpreting 2. London & New York: John Benjamins.
- Sperber, D & A. Wilson., D (1986). Relevance: Communication and Cognition. Oxford: Blackwell.
- Stenzl, C (1989), "From Theory to Practice and from Practice to Theory," in Gran and Dodds (eds), pp. 6-23.
- 龐焱 (2014a). 「日中同時通訳における誤訳しやすい長文の特徴について」(『神戸女学院大学論集』174号)
- 龐焱 (2014b). 「日中同時通訳における誤訳しやすい長文に関する実証研究序説」(『神戸女学院大学論集』173号)
- 劉和平 (2005). 『口译理论与教学』北京：中国对外翻译出版社 pp. 126
- 孫致礼 (2003). 『新编英汉翻译教程』上海外语教育出版社
- 鲍鋼 (1998、2005) 『通訳理論概述』北京：旅行教育出版社/中国对外翻译出版公司
- 万宏瑜、杨承淑 (2005). 「同声传译中顺译的类型与规律」(『中国翻译』) p. 73-77
- 楊承淑 (2011). 『口译的信息处理过程研究』輔仁大学出版社
- 仲偉合 (2008). 『英語同時通訳教程』北京：高等教育出版社

(原稿受理日 2015年9月17日)